

# “社会的失言 (faux pas)” 検出課題と 自閉症スペクトラム指数の臨床的適用に関する考察

—二つのアセスメント事例から—

椿 田 貴 史

## 序

本稿では、Baron-Cohen, S. がアスペルガー・タイプの自閉症における社会的知能の障害を検討するために提示した“Faux-Pas (社会的失言) 検出”課題に内在する問題点を検討する。事例においては、同じ著者による自閉症スペクトラム指数テスト、知能および神経心理学的問題を検討する WAIS-R を併せて実施した。アセスメントとそれに関連するいくつかの調査結果を報告する前に、この研究が置かれた理論的な文脈を手短に紹介し、筆者の立場を明確にしておきたい。

まず、“社会的失言”検出課題は、Baron-Cohen, S. らが提示している、“自閉症者における「心の理論」欠如説”の核となるような実験課題である。彼によれば、自閉症者の「心の理論」課題（後述）の通過率は健常者やダウン症者らに比べて有意に低い。一連の「心の理論」課題のうち、高機能自閉症の患者をターゲットにしたものは少なく、おそらく、神経心理学的な関心から作成されたものは、Faux-Pas 課題のみであろう。よって、これを日本語に翻訳し、実施できるようにすることには、一定の臨床的意義があるものと思われる。次に、「心の理論」について簡単に振り返っておきたい。

## 1. 「心の理論」

「心の理論 (Theory of Mind)」とは、他者の内的状態（感情、信念、知識など）について推論し、それに基づいて他者の行動を予測・解釈するために必要な心的能力のことである (Wimmer, H. & Perner, J., 1983)。発達心理学を中心とした研究により、人が他者の心の状態を意識し、適切に推論できるようになるのは、平均的には4歳くらいからであるとされている<sup>1)</sup>。

ところで、我々の内的な機構に関して、「理論」という言葉を充てることには若干の違和感があるが、直接観察することができない他者の内的状態について、何らかの心的内容(感情や志向性)を帰属させる営みは、形式的には「理論的」な作業である。その内実については、様々な仮説があるが、基本的には人の心を考察するための“認知的な処理機能”という捉え方が一般的であるように思われる。

我々の日常生活における人間関係は、他者の心の状態と行動を推論することによって成り立っている。当然、この心的機構の障害は、円滑な人間関係を作り上げ、保つことを困難にする (Fodor, 1987)。身近な他者との情緒的な交流に乏しいカナー・タイプの自閉症においては、この能力に関係する神経心理学的機能に何らかの障害が想定されている (例えば、Adolphs, R., et al., 2002)。

健常者でも直接には見えない他者の心の状

1) 幼児における他者理解に関して、筆者は詳細な調査 (未発表) を行い、幼児が他者の心の状態について理解するのは、4歳より以前の段階であることを確認している。

態について、勘違いをしたり、事実とは異なる推論をする場合がある。この点では、健常者も自閉症者と何ら変わらない。しかし、自閉症者は“人が他者の心的状態について、誤った表象を抱くことがあり得る”という表象を心的に処理することが困難である。自閉症を「心の理論」の機能不全あるいは欠如と見なす研究者たちは、健常者と自閉症者を能力的に隔てる分水嶺がここにあると考えている。

例えば、電話を片手に涙を流している女性がいるとして、その女性の感情的状態は「悲しい」に違いないとか、その「悲しい」理由は、電話で悲しみをもたらすような情報を聞いたからだろう、という場合を考えてみよう。この情景を目にしている私は、目の前の情報から構成された（一次的な）表象を通じて、他者の心の状態を処理（推論）する。「目の前の女性は、悲しんでいるに違いない」という信念が私の心の中で生じる。しかし、この私の信念は、誤っている可能性がある。

自分が他者の内的状態に関して抱いている信念の内容が、実は誤っている場合、その信念を操作的に、「第一次の誤った信念」と見なす。例えば、実際には、彼女は悲しいから泣いているのではなく、うれしいから泣いていた、ということが事後的にでも確かめられた場合である。“第一次”は、誤った信念を抱いていたのは「私」である、というほどの意味である。

1980年代以降、発達心理学を中心に盛んになった「心の理論」研究は、「第二次の誤った信念」課題に関するものである。すなわち、他者Aが抱いている、もう一人の他者Bの内的状態に関する信念は誤っており、他者Aはその誤った信念に基づいて、どのような行動をとると予測されるか、と被験者に問う課題である。ここでは、誤った信念を抱いているのは被験者ではなく、実験で示される絵やストーリーの登場人物である。よって、

ここでは「他者Aが誤って抱いている、他者Bについての信念」が問題となっているので「第二次の誤った信念」としている。上の例に即して考えるならば、電話で泣いている女性を見て心配そうにしている傍らの紳士は、彼女が悲しみから涙を流していると勘違いして（無理からぬ事だが）、ハンカチを出して彼女を慰める、という場合である。ここでの「第二次の誤った信念」とは、紳士が抱いている、女性の内的状態についての信念である。この「第二次の誤った信念」を健常者は認識して、紳士の誤った行動を容易く解釈することができる。

## 2. 「心の理論」課題の展開

「第二次の誤った信念」を処理できるかどうかを見分ける代表的な課題を紹介しよう。

### ・アイスクリーム屋の課題

アイスクリーム屋の課題では、二人の子ども（AとB）が公園でアイスクリーム屋のトラックを見つけるが、お金がない。アイスクリーム屋の売り子はお昼からもずっとこの公園にいる、と二人に告げたので、二人はそれぞれ家にお金を取りに帰った。彼らが去った後、アイスクリーム屋は、駅前ならばアイスクリームがもっと売れるだろうと考え、駅へ移動してしまう。その途中で、彼は子どもAと出会う。どこに行くのかというAの質問に、アイスクリーム屋は「駅前に行く」と答える。次の場面では、BがAの自宅の呼び鈴を鳴らす場面である。Aの母親が出てきて「Aはアイスクリームを買いに出て行った」とだけ答える。ここまで物語が展開して、被験者に次のような問いをする。〈さて、Bは次にどこに行こうとするでしょう〉。

この場合、答えは〈公園〉なのだが、この

アイスクリーム屋の課題についての追試 (子安, 1998) では、健常 6 歳児の通過率は 58 % (N = 108)、大学生の通過率は 86 % (N = 57) となっている。大学生がこの課題を通過できない要因については、それほど立ち入った検討はなされていないようである。筆者は心理学の講義中にこの課題をアニメーションで提示し、それについての感想を書いてもらうという予備的調査をした。その感想のなかに、「自分も答えを間違えてしまった」という学生が 1 割弱含まれていた。大学生の 86% という通過率とその要因に関しては、改めて詳しい分析が必要であろう。

さて、こうした幼児向けの課題は、その単純さ故に、高機能自閉症者の社会的認知特性を考察できない。彼らは、課題の構造が単純な場合、通常とは異なる方略で課題を解決してしまうからである<sup>2)</sup>。

Baron-Cohen, S. は、年齢的に小学校高学年向け (10 歳前後) の「心の理論」課題を作成して実験を実施している。課題は例えば次のような場面を語り聞かせ、その中で何か言っただけではないような発言 (faux pas) が含まれていたかどうかを質問するものである。

#### ・ faux pas 課題の例

〈ミチル君はトシヒコ君の誕生日プレゼントにおもちゃの飛行機をあげました。数ヶ月後、二人は一緒にその飛行機で遊んでいました。そのとき、ミチル君は飛行機を落としてしまい、飛行機は壊れてしまいました。トシヒコ君は「気にしないで、これ

好きじゃなかったんだ。誰かが僕の誕生日プレゼントにくれたの。」と言いました。〉

質問：〈さて、今のお話で、誰か何か言っただけではないことを言いましたか〉

この場面では、下線部が社会的失言である (Faux-Pas 有)。一方、下線部が「ああ、君がくれた飛行機、壊れちゃったね……」である場合には、社会的失言は含まれていない (Faux-Pas 無)。Baron-Cohen, S. による研究では、アスペルガー症候群の患者群は健常者群に比べ、社会的失言の検出率が有意に低い。これは、彼らの社会的コミュニケーション能力の問題と関連していると考えられている。この課題は、高機能自閉症における社会技能やコミュニケーション能力の問題を検出するもので、単純な「誤った信念」の表象を問う課題ではない。大学生を含めた大人の社会的な認知機能をアセスメントできるこうした課題は、社会的な知能をターゲットにしている。

次に、この社会的知能について、神経心理学的な研究を振り返ろう。

### 3. 「心の理論」と神経心理学—社会的知能仮説

他者の内的状態を把握する能力は、社会的知能 Social Intelligence (Baron-Cohen, S. 1999) と捉えられている。そして、社会的知能は、社会経験を通じて成長するが、生物学的な基礎もあると推論されている。動物実験や死後解剖、そして fMRI による画像診断によって、

2) 例えば、論理的な方略で、B に与えた情報は「アイスクリーム屋が公園にいる」のみである、とするならば、A の行動やアイスクリーム屋の行動を全く考慮せずに答えを導き出せる。ところでこの課題のねらいは、被験者が知っている新たな情報 (A の行動やアイスクリーム屋の実際の居場所など) を、B は知らない、ということを知覚的に処理させる点である。“B の (A についての) 誤った信念” を認知的に処理せずに回答を行う場合は、これらの情報がいわば位置づけの不明なノイズとして、B の行動の推測処理に干渉する可能性がある。そのため、大学生の誤答率が高くなるのではないかと筆者は考えている。これに関連して、Mitchell, P. ら (1996) は、幼児が通過できた「誤った信念」課題について、健常な大人が通過できない場合があることを実験的に明らかにしている。

社会的知能については扁桃体が関与していることが明らかにされている<sup>3)</sup>(Brothers, L. R., et al, 1990; Baron-Cohen, S., 1999a)。そのことと関連して、カナリー・タイプの自閉症者、およびアスペルガー症候群の患者においては、上のような課題の通過率は健常者に比べて有意に低いことが実験によって明らかにされている (Baron-Cohen, S. et al., 1986; 1999a; 1999b)。また、精神病理学的問題を抱えているために、適切に他者の心の状態を推論することが困難な統合失調症の患者群においても、同様の「誤った信念課題」の正答率は健常者群に比べて低いことがわかっている (Langdon, R. et al., 2001; 2002)。

もちろん、他者の心の状態について、著しい理解困難があることが、そのまま自閉症の診断を決定したり、統合失調症などの精神病理の存在を確定する基準とはならない。例えば、Mitchell, P. et al. (1996) による研究では、健常な大人でも、特殊な条件下においては、他者の「誤った信念」が存在していないかのように振る舞うことが指摘されている。

総じて、これらの研究から、他者の心の状態を推論する神経心理学的な機能単位が他の機能とは独立して存在するらしいことが分かる。fMRI による所見からも、この種の能力に関連する皮質部位がいくつか見出されている (Saxe, R. et al., 2004)。

これらの研究に示唆を得て、筆者は社会的しくじりを検出する能力について社会的知能仮説の立場からアプローチし、その知能を成立させている下位因子のいくつかを取り出したいと考えている。以下に faux pas 課題と、同じ著者によって開発された自閉症スペクトラム指数の検査の問題点を検討する。ここで

の調査は、上の社会的知能仮説の研究に関連する予備的な作業にすぎない。

## 4. 方法

### 4.1. Faux-Pas 課題

Baron-Cohen, S. によって1999年に発表された論文に掲載されている課題を用いた。彼は統制のために素材を音読した録音テープを被験者に聞かせるという形式で、ランダムに〈faux pas 無し〉の刺激を混ぜて、実験を行っている。録音テープによる刺激提示は、被験者に余計な負担を強いるだけに思われる。筆者は、各場面の叙述が理解できたかどうか被験者に確認し、理解できたと判断された時に、質問文を口頭で伝えた。理解が困難な場合にはゆっくりともう一度読み返し、課題に差し障りのない範囲で若干の言い換えを行った。

### 4.2. 知能検査及び自閉症スペクトラム指数検査

Baron-Cohen, S. の仮説に従えば上の課題に躓く被験者は、社会的知能に問題があると推論することができる。ここでは、この仮説を逆方向から検討するため、自閉症的傾向の強い被験者が、faux pas 課題についてどのような要因から誤答するのかを調べた。被験者の自閉症的な傾向は、Baron-Cohen, S. (2001) による Autism-Spectrum Quotient (AQ) を用いた。本邦では、若松ら (2004) によってその標準化が試みられているので、それをそのまま利用した。

faux pas 課題をパスできない場合、被験者が課題そのものをどのように捉えているかを

3) 扁桃体は Adolphs, R., et al. (1994; 1995) による実験によって、顔の表情の認識や処理 (例えば“恐怖の表情”の読み取り) に関与していることが明らかにされている。同様の結果は fMRI によっても裏付けられている (Breiter et al., 1996)。高等霊長類の動物実験では、扁桃体の破壊によってクリューバー・ビューシー症候群 (性行動の異常〈オスのみ〉、恐怖心の消失、攻撃性の低下) が生じる (馬場, 1991)。

調べなければならない。誤答の要因は自閉症的なものにだけ由来するとは限らない。被験者の刺激に対する解釈の傾向を何らかの仕方  
で把握しなければ、faux pas 課題は臨床的な妥当性を保つことができない。被験者の理解の程度や構造を把握するためには、その課題を処理するために動員されると考えられる認知的側面を知能検査によって精密に検査し、その質や量を明確化する努力が必要である。今回は1名(被験者B)についてWAIS-Rを実施した。もう1名(被験者A)は、外的な事情から実施を見合わせた。その代わりに、faux pas 課題の実施時に、被検査に想起—再生の課題を緩やかに与え、検査者と会話しながら、理解の程度や傾向を把握した。

#### 4.3. 被験者

実験に参加した大学生<sup>4)</sup>のうち、AQの総合得点が健常者群(若松ら、2004)平均より1標準偏差以上高い被験者が数名含まれていた。ここに掲載するのは、そのうちの2名の結果である。ちなみに、2名のうちAQのより高い学生(被験者A)は、文章理解の困難を訴えている。

被験者は、筆者によって翻訳された faux pas 課題を読み上げられ、その物語の中で「言っ  
てはいけないことが誰かによって言われた

か」を問われる。このとき、課題を理解できなかったり、誤解が考えられる場合には、物語そのものの理解を促すための働きかけがなされた。その際、登場人物の心的状態についての情報は与えず、登場人物が置かれている状況、文脈、発言の確認と、代名詞の明確化、前後の順序の確認がなされた(課題については Appendix を参照)。

## 5. 結果

### 5.1. 自閉症スペクトラム指数

AQ については、表1のような結果となった。

若林ら(2004)らによる標準化データと比較すると両被験者ともにAQが1SD以上高い。被験者Aは、特に「注意の切り替え」「細部への注意」の二つの項目が正常群よりもかなり高い。ちなみに、AS/HFA群(アスペルガー自閉症者、高機能自閉症者群)の平均はそれぞれ7.9(1.43)、6.2(2.22)である。

若林ら(2004)によって試みられた標準化を参考にすると、合計点で33点以上が障害レベルと診断される。被験者の得点は31(A)と28(B)である。健常青年(大学生)の累積比率を見ると、31点以上および28点以上はそれぞれ全体の7.6%、19.8%である。

表1 自閉症スペクトラム指数 (AQ)

	被験者A	被験者B	平均*(SD)
総合	31	28	21(6.29)
社会的スキル	4	5	4.1(2.57)
注意の切り替え	8	8	5.3(1.96)
細部への注意	10	9	4.8(1.96)
コミュニケーション	5	3	3.8(2.11)
想像力	4	3	3.5(1.86)

\* 男性青年健常者(男子大学生、N=550)、若林ら(2004)による

4) 本学の学生ではない。

## 5.2. 知能検査（被験者 B のみ）

WAIS-R の結果は表 2 のとおりである。

表 2 WAIS-R

言語性 IQ(VIQ)	98
動作性 IQ(PIQ)	82
総合 IQ(FIQ)	90*

\*VIQ - PIQ = 16 ( $p < .05$ )

小林ら（1998）による WAIS-R のプロフィール分析に従って分析する。

総合 IQ は 90(±3) である。小林らは、言語性 IQ と動作性 IQ の有意な差 (V-P discrepancy) として 11 点という値を採用している。この被験者については、差が 16 点なので言語性 IQ が優位で動作性 IQ が低い discrepancy を示している ( $p < .05$ )。よって、90 という総合 IQ には信頼性がない。この被験者の場合、総合 IQ は自閉症スペクトラム指数と合わせて考察する必要がある。次に、下位検査の評価点について検討したい。

### (a) 言語性下位検査

〈類似の発見〉が評価点 6 とかなり低い結果となっている<sup>5)</sup>。それ以外は平均的な数値である。被験者は短期記憶や長期記憶について問題はないが、複雑な概念的操作を要求するような〈類似の発見〉課題で躓いている。

### (b) 動作性検査

〈絵画完成〉と〈絵画配列〉が平均的で、〈積み木模様の完成〉がやや低い結果となっている。そして、〈組み合わせパズル〉と〈符号記入〉がかなり低い。AQ を参考にすると、“注意の切り替え”、“細部へのこだわり”がこうした課題の遂行を困難にしていると言えそうである。

### (c) すべての下位検査

相対的には、〈知識〉〈単語〉〈絵画配列〉

において、評価点が高く、〈類似の発見〉と〈組み合わせパズル〉〈符号記入〉が低い。アスペルガー・タイプの自閉症の場合、〈絵画配列〉が低くなる傾向がある。この被験者はアスペルガー自閉症者に特有のプロフィールには一致しない。従って、AQ 得点の高さおよび言語性 IQ と動作性 IQ の discrepancy は別の要因によって説明されるべきかもしれない。

### (d) プロフィール分析の結果

比較的一貫性のある仮説候補としては、「習得知識／長期記憶」因子（習得知識、長期記憶、学校での学習、記憶、知識の豊かさ、知的好奇心と努力、初期環境の豊かさ）「検索」、「有意味画の視知覚」「視覚体制化」能力の強さが表れている。一方、「言語的推理」「抽象的思考」「視覚－運動の速さ」の能力が弱い。これらのプロフィール解釈仮説の候補のうち、被験者のパフォーマンスを最も良く説明する仮説は、AQ および faux-pas 課題と合わせて考察したい。

## 5.3. faux-pas 課題

被験者 A：すべて正解（再生困難）

被験者 B：すべて正解

被験者の反応を要約する。被験者 A は、すべてのエピソードについて faux pas の有無について正解したものの、物語の再生と faux pas の意味づけが困難であった。想起においては、提示された状況の細部（時間的前後関係や状況設定）を誤ることがあった。また、登場人物の心的状態や意図についても誤解が含まれる報告がなされた。よって、faux pas 検出課題をクリアしたからといって、必ずしも、他者の心の状態や社会的なしくじりを正しく文脈の中で理解しているとは限らない、という結果が示されている。

5) 例えば、「タンスと椅子の共通点」（どのように似ていますか？）として、“どちらも家具である”という答えが出ないなど。

被験者 B は、WAIS-R の結果（特に絵画配列）が示すとおり、faux-pas の検出はすべて成功している。また、課題の再生も特筆すべき問題もなくこなすことができた。この被験者は極めて論理的かつ流暢に課題で展開される物語を再生することができた。

## 6. 考察

被験者 B は自閉症スペクトラム指数が高く、数値だけを参考にすれば、faux pas 課題のつまずきも十分予想されるだろう。しかし、実際には何の問題もなく通過することができている。被験者は、趣味としてアニメーションやドラマなどを鑑賞し、涙を流したり、感動してその話を家族に話して聞かせるようなことが多いとのことであった。また、実際の対人場面では、社会的な礼節を重んじる傾向を強く持っており、礼節を尽くさない同世代とは一定の距離を置いている、ということであった。こうした対人行動パターンと、物語やアニメについての強い興味関心が AQ を数値的に上げる要因になっているのであろう。以上を勘案するならば、AQ と faux pas 課題の結果の解離はそれほど違和感なく受け入れることができる。

WAIS-R では言語性 IQ が優位になる discrepancy が見られたこと、また被験者のプロフィールが、高機能自閉症者に特有のプロフィールとは異なっていることから、被験者 B の神経心理学的問題は別の点にあると予想される。総じて、この被験者の結果から学ぶべき点は、自閉症スペクトラムにおいて高い位置にあるということが必ずしも、自閉症的な認知傾向に伴う弱点を持っているということにはならない、という事実である。臨床的には、AQ は faux pas 課題や WAIS-R などの検査とバッテリーを組んで数値の意味を考える必要がある。

一方、被験者 A については、AQ が数値的

にかなり高かった。この被験者は、ほぼすべての課題について、読み返しの要求があった。また、一度目の読み上げの後〈理解できましたか〉という問いかけに頷くことがあっても、細部の明確化や場面設定、状況理解のための追加情報が必要であった。おそらく、Baron-Cohen, S. が行っているような録音テープによる実施では、すべての課題について通過が困難であろう。

faux pas 課題でのつまずきは、他者の心の状態を把握することが困難、つまり「第二次の志向性」の理解困難だけではなく、与えられた物語状況を理解する際に、細部の情報がノイズとして干渉するという点が大きいと思われる。例えば、被験者 A は物語 1 (faux pas 有) において、次のように説明している。

読み上げ文：太郎は新しい学校に通い始めました。彼は新しい友達の次郎に「お母さんがここの給食を作っているんだ」と言いました。そこに美由紀がやってきました。彼女は「ここの給食のおばさんたちって大嫌い。ほんといや」と太郎たちに言いました。次郎は美由紀に「一緒にトランプでもやらない？」と言いましたが、美由紀は「ううん、やめとく。気分悪いの」と言いました。

被験者 A の発言：「みゆきが、給食のおばさんたちが気に入らない、ということが、まずい。」〈検査者：なぜ？〉「それは、おばさん本人に直接言わないで、次郎に言った(から)。(給食を作る職場には) 太郎の母親以外にもたくさんいる (ので)、どの人が気に入らないのか、というのがちょっと。どういうところが、気に入らないのか、が理解できない。」

物語では、新入生の太郎が自分の母親について、この学校の給食を作っている、と紹介した。その直後に美由紀が「ここの給食のおばさん大嫌い」と言うのであるが、この場合、

社会的失言は、美由紀がどの人に対して、また何に対して嫌悪感を露わにしているかにかかわらず成立する。このような物語に含まれる情報以外の副次的な事柄や関心が発言の社会的な意味を理解する過程に干渉しているように思われる。

別の物語では、物語状況の把握の段階で、被験者に多大な認知的負荷をかけていることが示唆される結果となった。

読み上げ文：近所のおばさんが家に着いたのは、ちょうど紀子が母親を手伝って、フルーツパイを作っているときでした。紀子はパイを台所から持ってきて、「今、おばさんのために作ったのよ」と言いました。「う～ん、とてもおいしそうだ。パイは大好きよ。特に、フルーツパイはね」とおばさんが言いました。

被験者Aの発言：「(失言は) なかった……。その紀子と母親はおばさんが来るといのは知っていたのですか？」(もう一度読む)「ということは、知っていた……」

上の課題では、被験者は近所のおばさんが紀子の家を訪ねることと、パイを焼くこととの関係について誤解していることが判明した。その結果、*faux pas* 無しと判断している。この解答は正しいが、被験者の思考過程と課題の本質にずれが生じている。*faux pas* が有るか無いかという二値論理的な回答を被検査に求める点において、この課題には大きな制約があると言えるだろう。こうした被験者の読解力や記憶力に負担を強いた上での検出課題は、臨床的には問題であり、課題をより平易にするか、別な提示方法(課題をスライドで提示するなど)を考案することが必要であると思われた。

同様に、物語5では次のような発言があった。

読み上げ文：ジェリーは短い茶髪です。彼女はテリーおじさんの家にいました。家の呼び鈴が鳴りました。近所のスミスさんです。スミスさんは「こんにちは」と言って、ジェリーを見ると、「おや、このおじょうちゃんには会ったことがないな。お名前は？」と聞きました。テリーおじさんは「お茶でもどうかな」と言いました。

被験者Aの発言：「ジェリーは女。逆に、ジェリーのほうは、そのスミスという人を知っているのですか？そのスミスという人はジェリーのことを知らないけれど、ジェリーはスミスのことを知っているのですか？ジェリーのほうは、スミスのことを近所の人ということを知っている、スミスという人は……(中略)……〈検査者による再読〉彼女はテリーおじさんの家にいた。〈ジェリーがテリーおじさんの家の呼び鈴をならしたと勘違いしていたことに気がつく〉。この場合はないと思う。別にないと思う。」

被験者の誤解どおり、たとえジェリーがテリーおじさんの家の呼び鈴を鳴らしたとしても、「おや、このおじょうちゃんには会ったことがないな。お名前は？」という発言から、ジェリーとスミスさんが初対面であることは容易に推論できるはずである。検査者はこのような物語の理解について、被験者に明確化を促した。その結果、この推論を困難にしているのは、“なぜ、この三者が集まるのか”という点についての被験者の関心であった。この注意の移動が、物語の理解をより複雑にしているように思われた。こうした物語の細部へ注意を集中させてしまうことは、自閉症スペクトラム指数(AQ)の結果に対応しているように思われる。AQにおいては「注意の切り替え」「細部への注意」において得点が高かった。よって、被験者Aにおいては、実際に自閉症的な傾向が強い、つまり高機能

自閉症的な傾向がある、ということが推測できる。このような被験者の社会的能力の把握は、課題遂行の結果（正答率、通過率など）からは引き出されず、むしろ被験者の回答にいたるプロセスとそのため動員される認知を検査者が確認することで可能となった。

## 結語

faux pas 課題における被験者 A のパフォーマンスは、結果のみを見るとすべて正解であった。このことは、faux pas 課題の問題を露わにしていると思われる。よって、社会的しくじりや失言を、読み上げられた物語を通じて検出する課題は、1) 短期記憶に負荷をかけず、2) ターゲットとなる発言内容以外の細部へと注意が移らないような明瞭さがある、という二つの条件を満たさなければならない。

今後は、より臨床的に活用できる課題を開発すべく、Baron-Cohen, S. らによって進められている神経心理学的アプローチを注意深く見守ってゆきたい。

## 参考文献

- Adolphs, R., Tranel, D., Damasio, H., Damasio, A.R. (1994). Impaired recognition of emotion in facial expression following bilateral damage to the human amygdala. *Nature* 372: 669–672.
- Adolphs, R., Tranel, D., Damasio, H., Damasio, A.R. (1995). Fear and the human amygdala. *Journal of Neuroscience* 15: 5879–5891.
- Adolphs, R., Baron-Cohen, S. and Tranel, D. (2002). Impaired Recognition of Social Emotions following Amygdala Damage. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 14: 8, 1264–1274.
- 馬場元毅 (1991). 絵でみる脳と神経 しくみと障害のメカニズム, 医学書院.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M. & Frith, U. (1986). Mechanical, behavioural and intentional understanding of picture stories in autistic children. *British Journal of Developmental Psychology*, 4, 113–125.
- Baron-Cohen, S., O’Riordan, M., Stone, V., Jones, R., and Plaisted, K. (1999a). Recognition of Faux Pas by Normally Developing Children and Children with Asperger Syndrome or High-Functioning Autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 29:5, 407–418.
- Baron-Cohen, S., Ring, H., Wheelwright, S., Bullmore, E., Brammer, M. Simmons, A. & Williams, S. (1999b). Social intelligence in the normal and autistic brain: an fMRI study. *European Journal of Neuroscience*, 11, 1891–1898.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J. & Clubley, E. (2001). The Autism-Spectrum Quotient (AQ): Evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5–17.
- Breiter, H., Etcoff, N., Whalen, P., Kennedy, W., Rauch, S., Buckner, R., Strauss, M., Hyman, S. & Rosen, B. (1996). Response and habituation of the human amygdala during visual processing of facial expression. *Neuron*, 17, 875–887.
- Brothers, L., Ring, B. & Kling, A. (1990). Responses of neurons in the macaque amygdala to complex social stimuli. *Behav. Brain Res.*, 41, 199–213.
- Fodor, J. A. (1987). *Psychosemantics: The problem of meaning in the philosophy of mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 小林重雄、藤田和弘、前川久男、大六一志、山中克夫 (1998). 日本版 WAIS-R の理論と臨床. 日本文化科学社.
- Langdon, R., Coltheart, M., Ward, P., Catts, S. (2001). Mentalising, executive planning and disengagement in schizophrenia. *Cognitive Neuropsychiatry*, 6:2, 81–108.
- Langdon, R., Davies, M., & Coltheart, M. (2002). Understanding mind and understanding communicated meanings in schizophrenia. *Mind & Language*, 17: Nos 1 and 2 February/April, 68–104.
- 丸野俊一、子安増生 (1998). 子どもが「こころ」に気づくとき. ミネルヴァ書房.
- Mitchell, P., Robinson, E. J., Isaacs, J. E., Nye, R. M., (1996). Contamination in reasoning about false belief: an instance of realist bias in adults but not children. *Cognition*, 59, 1–21.
- Saxe, R., Carey, S., and Kanwisher, N. (2004). Understanding other mind: linking developmental

psychology and functional neuroimaging. *Annual Review of Psychology*, 55, 87-124.

Stone, V., Baron-Cohen, S., Knight, R. T., (1998). Frontal Lobe Contributions to Theory of Mind. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 10:5, 640-656.

若林明雄, 東條吉邦, Baron-Cohen, S., Wheelwright, S.(2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討. *心理学研究*, 75:1, 78-84.

Wimmer, H. & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.

## Appendix. faux pas 課題

### (\* は faux pas 有)

1\*. 太郎は新しい学校に通い始めました。彼は新しい友達の次郎に「お母さんがここの給食を作っ

ているんだ」と言いました。そこに美由紀がやってきました。彼女は「ここの給食のおぼさんちあって大嫌い。ほんといや。」と太郎たちに言いました。次郎は美由紀に「一緒にトランプでもやらない？」と言いましたが、美由紀は「ううん、やめとく。気分悪いの」と言いました。

2. 哲男はトイレの個室にいました。進と宏が洗面台にやってきました。進は「クラスの新人知ってる？ 哲男っていうんだ。なかなか良い奴だねえ」と言いました。ちょうどそのとき、哲男が個室から出てきました。宏は哲男に、「おっす、サッカーしに行かない？」と言いました。

以下略 (計 8 つの物語を読み上げ、faux pas 有りと無しはそれぞれ 4 つである。どちらもランダムに配列した)。